

「パウロ、最高法院を混乱させる」

2016年09月08日

使徒言行録 23章 6節～11節 パウロは、議員の一部がサドカイ派、一部がファリサイ派であることを知って、議場で声を高めて言った。「兄弟たち、わたしは生まれながらのファリサイ派です。死者が復活するという望みを抱いていることで、わたしは裁判にかけているのです。」パウロがこう言ったので、ファリサイ派とサドカイ派との間に論争が生じ、最高法院は分裂した。サドカイ派は復活も天使も霊もないと言い、ファリサイ派はこのいずれをも認めているからである。そこで、騒ぎは大きくなった。ファリサイ派の数人の律法学者が立ち上がって激しく論じ、「この人には何の悪い点も見いだせない。霊か天使かが彼に話しかけたのだろうか」と言った。こうして、論争が激しくなったので、千人隊長は、パウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと心配し、兵士たちに、下りて行って人々の中からパウロを力づくで助け出し、兵營に連れて行くように命じた。

その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証したように、ローマでも証しをしなければならない。」

ローマの千人隊長はパウロとユダヤ人たちとの間で起こった騒ぎの真相を最高法院で取り調べることにした。まず、パウロの方から居並ぶ権威ある議員たちに、「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました」と発言した。大祭司のパウロの口を打てという命令に、パウロは口を封じる律法に背く裁判だと激しく反論した。そして、大祭司職に関する緊張した問答があった。

その後、最高法院は下記のように展開していく。パウロはサドカイ派とファリサイ派の議員たちがいることを知って、声を高めて、「兄弟たち、わたしは生まれながらのファリサイ派です。死者が復活するという望みを抱いていることで、わたしは裁判にかけているのです」と言った。裁判は、原告が被告の罪を告訴することによって成り立つ。ところが、パウロの裁判においては、原告のユダヤ人側からの告訴は述べられていない。パウロの方から「死者が復活するという望みを抱いていることで、わたしは裁判にかけている」と、告訴の論点は死者の復活問題であると言っている。原告の告訴が述べられないおかしな裁判で、当初から、パウロの独壇場となって展開されていった。このパウロの発言から、最高法院は大混乱に陥っていく。

サドカイ派は復活も天使も霊もないという現実的な教理に立っていた。ファリサイ派は、これらを信じる教理を持っていた。パウロの死者の復活の主張を聞き、ファリサイ派の律法学者たちは立ち上がって、「この人には何の悪い点も見いだせない。霊か天使かが彼に話しかけたのだろうか」と論じ、パウロに味方する論陣を張った。すると、対立するサドカイ派の祭司たちは激しく反論した。死者の復活に関する問題から、サドカイ派とファリサイ派の争いが激化し、最高法院は分裂した。パウロは両派に引き裂かれそうになったので、千人隊長は力づくでパウロを助け出し、兵舎に連れて行くように命じた。

パウロは自分をファリサイ派と名乗り、復活の議論を持ち出している。それによって、ファリサイ派とサドカイ派の激論が起こり、最高法院は混乱すると見込んでのパウロの策略だったのではないか。思惑通りの混乱が起き、パウロは先ずは千人隊長に保護された。

その夜、主はパウロの傍に立って、「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証したように、ローマでも証しをしなければならない」との使命を告げられた。